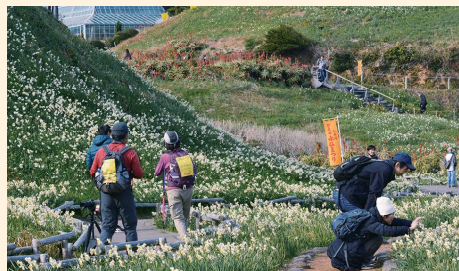


～下田のデキゴト～



1/4 火の用心、地域の力、「消防団」

下田市消防団出初式が団員 62 名の参加のもと下田小学校体育館で行われました。市長式辞、団長訓示、各種表彰等が行われ、団員の士気高揚が図られました。市民一人ひとり防火意識を高め、火の元の確認を行いましょ！



1/7.8 早春の下田を歩き初め！

下田水仙ツーデーマーチが3年ぶりに開催されました。全国から集まった延べ 517 名のウォーカーが、満開の水仙が咲き誇る爪木崎を楽しむコースや開国の歴史を偲ぶコースを歩いて早春の下田を満喫しました。



1/12 いざというときどう動く？

大規模地震を想定した救護所訓練と避難所訓練を下田中学校で行いました。中学生、若下区自主防災会、医療関係者等が参加し、負傷者の治療の優先度を定める「トリアージ」の方法などを学びました。

1月の
できごと

- 4日 下田市消防団出初式
- 6日 市内小・中学校始業式
- 7.8日 下田水仙ツーデーマーチ
- 8日 二十歳の集い



1/6 大島を彩る椿の花をPR

伊豆大島からキャラバン隊一行が市役所を訪問しました。1月29日から開幕する「伊豆大島椿まつり」では、約 300 万本の椿が観光客を迎えてくれます。大島を観光してみたいかたがでしょうか。



1/9 秋山選手野球教室

広島東洋カープ所属の秋山翔吾選手をはじめプロ野球選手の方々の指導による少年野球教室が開催されました。この野球教室を通して、賀茂地区の野球界が盛り上がりつつあることを期待しています。



1/22 3年分の思いをタスキに込めて

第 51 回下田・河津間駅伝競走大会が4年ぶりに開催され、32 チームが参加しました。各部門優勝は中学男子・女子「下田中学校」、高校男子「稲取高校」、一般男子「梓友会と仲間達」、一般女子「下田高校」でした。

- 9日 秋山選手野球教室
- 14日 子育てサポート育成講座
- 21日 ドローン実証実験
- 22日 下田・河津間駅伝競走大会

地域子育て支援センター通信

問合せ先 地域子育て支援センター ☎02200



3月の予定

- 1日(水) めだかルーム 9時～11時30分
- 7日(火) おれんじルーム 13時～15時30分
- 8日(水) あひるルーム 9時～11時30分
- 10日(金) ふれあい遊び ※午後閉館(清掃・消毒)
- 13日(月) 体育館で遊ぼう 9時30分～11時
場所：市民スポーツセンター(サンワーク)
- 15日(水) うさぎルーム 9時～11時30分
- 17日(金) 誕生会 10時30分～
- 27日(月) 発育測定・育児相談 9時～11時
保健師・栄養士来所
- 30日(木) ふれあい遊び※午後閉館(清掃・消毒)
- 31日(金) 閉館(年度末事務整理日)

※予定は変更になる場合があります。
詳細は子育て支援センターまでお問い合わせください。



数根公園で遊ぼう こま作り

ウメのつぼみがほころび始め、ようやく季節の移り変わりを感じられるようになってきました。少しずつ春の音が聞こえてくるようです。支援センターの花壇のチューリップの球根は芽を出し、春を心待ちにしています。また、体調管理が難しい時期ですので、手洗い・栄養・睡眠で元気に過ごせるようにしていきましょう。
支援センターでは、換気や消毒をして衛生的で安全な環境を作り、皆さまをお待ちしています。



赤ちゃんとのふれあいタイム 誕生日会

こんにちは、市長です

伊豆縦貫道と天城越え

来たる3月19日に伊豆縦貫道河津下田道路Ⅱ期の一部区間(河津七滝IC～河津逆川IC)が開通します。
いよいよ賀茂地域に初めて高速道路が走るわけです。やがて全線が開通すれば、天城峠の北と南との間で人や物や文化など様々なものが今よりもっともつと行き来するようになると思います。
そこで今回は、「天城越え」の本質的な意義について歌や小説を援用して考えてみたいと思います。
石川さゆりの名曲「天城越え」では、「誰かに盗られるくらいならあなたを殺していいですか」と、すさまじい情念で「あなたと越えたい」のが天城峠であり、そんな二人が向かう先は非日常の空間と言えるでしょう。
小説「伊豆の踊子」においても物語は「高生の私」が天城峠を越える所から始まります。「道がつつら折りになっていよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながらすすまじい早さで麓から私を追ってきた」この、冒頭の見事な一文で、これが非日常の世界へ入っていくことが暗示されます。峠の茶屋で旅芸人一行に合流し、湯ヶ野温泉にしばらく逗留して、そののち、もうひと山越えてついに下田に到着する。「私」は路銀が底をついて、彼らに別れを告げ、汽船で東京に帰るといふほんの数日間の短い物語なのですが、このノーベル文学賞に結実した作品においても、「天城を越える」ということは大きな意味を持っている。
一つ目は、前述のとおり、日常から非日常への逸脱あるいは逃避というもので、ここでは天城峠があたかも境界のように意味づけられています。川端康成は別の論説において、伊豆を南の楽園のように表現しており、さらに、「天城峠の南で南国に出会わずしては、とりわけ伊豆の旅情である」とまで言っています。(続きは次号に)

